子どもと話そう **性**のこと**愛**のこと ◇6◇

いのちのはじまり ――教科書にない用語「性交」――

小学校3、4年生の保健教科書にある〝いのちのはじまり〟には、精子、卵子という用語が出てきます。「お母さんが持っている卵子とお父さんが持っている精子。それが〝合体〟すると、赤ちゃんになります」と私が説明すると、児童は「どうやって合体させるの？」。ところが教科書に「性交」という用語はありません。教師用の教科書指導書にはその理由について「発達段階を踏まえ、保護者の理解を得ることに配慮して（カットする）」と記されています。

そこで、私は黒い紙に縫い針で穴をあけた手作り教材を児童たちに渡して、光にかざして見てもらいます。「えっ、こんなに小さいの？」。そう、卵子の大きさは直径0．14ミリ、精子はもっと小さくて、長さ0．06ミリ。顕微鏡でないと見えません。「こんなに小さな精子だから、お父さんは用心して、お母さんのお腹の中の卵子のそばまで送り込んであげるの。そこで〝合体〟。それがいのちの始まりですよ」と教えます。

思い返せば1992年4月から、小学校の理科、保健体育の教科書に性教育が盛り込まれ、メディアは一斉に「性教育元年」と呼びました。

というのも文科省は、それまでの知識の詰め込みを改め、自ら学び考える生きる力を養う方向に転換。学校週5日制を開始し、1998年には、教育内容を3割削減。ゆとり教育と銘打って「総合的な学習」を新設し、社会見学、労働体験、性教育を導入しました。

ところが2年後、※OECDの学習到達調査による日本の児童・生徒の学力低下の数値が公表され、04年、急きょ全国学力テストを実施。こうして性教育バッシングがはじまり今日に至っています。

※経済協力開発機構